ミニ内航海運史　Ⅳ 水軍 1

（1）　古代の水軍

水軍は、東アジアの伝統的な水上兵力で、河川や湖沼における兵力の比重も大きく、水師、船師、舟師とも称した。我が国では、古代から沿海部の民が水上兵力となり、古代ヤマト政権の時代には、安曇部（あずみべ）や海人部（あまべ）、津守氏といった海の氏族たちが日本の水軍を支えた。古代の我が国の背骨は大阪湾、瀬戸内海にあり、後背に木材産地を確保し天然の良港を持った大豪族も独自の水軍を持った。

（2）　中世の水軍

平安時代に入ると、水上輸送する官物を強奪する海賊が現れ、貞観年間には瀬戸内海の海賊鎮圧の命令が出されている。海賊は当初、略奪行為をする小規模集団に過ぎなかったが、平安後期に入ると各地で荘園の領主から武士階層に発展したように、海上でも武力を持った者達が登場する。

瀬戸内では、摂津国渡辺津（現・大阪市中央区辺りの港）を本拠地として水軍系氏族の棟梁だった渡辺党、その一族で13世紀の元寇（げんこう＝鎌倉時代、大陸を支配していた元とその属国高麗による二度の日本侵略）に奮戦した肥前松浦の松浦（まつら）党、10世紀の藤原純友追討に伊予の水軍を率いた橘氏、備讃瀬戸・塩飽諸島の塩飽水軍、備後・因島、伊予・来島、能島(野島)にそれぞれ本拠を置く村上三島水軍、紀州では別当氏に代表される熊野水軍、伊勢志摩の九鬼（くき）水軍、さらに安芸の小早川氏、伊予の越智氏や河野氏、房総の里見水軍、三浦半島の北條水軍（三浦氏）、鹿児島の阿久禰（あくね）水軍、津軽から蝦夷地にかけての安東氏などが列挙される。各地の水軍の本拠地はときを経て、今日の内航海運の船どころに繋がってくる。また、水軍の船は和船の歴史上、重要な位置を占めている。

中世では、海辺の小土豪が結合して軍事力を持った海上勢力を『海賊衆』といい、徒党を組んでの略奪行為や金銭を代償に取った船舶航行の警護をし、幕府などの公権力の統制を無視して海上で独立した軍事力と権力を振るった。14世紀の海賊衆は、南北朝動乱期にそれぞれの側に分かれて戦ったが、室町時代になると陸の権力が海にも次第に及び、守護大名は周辺の海賊衆を警固衆に編成し、海上軍事力に利用した。さらに戦国時代になると、有力大名側は水軍の編成を働きかけ、警固衆として家臣団に組み入れた。このように、中世末期から近世の初頭にかけて日本の海上勢力は、自立した海賊衆から大名の統制による公権力の水軍に転化して行った。

水軍の大型軍船・安宅船（あたけぶね）。艪（ろ）を50挺あるいは80挺以上用いたと言われる。（写真提供 ： 船の科学館）